

書評 「共時性：非因果的連関の原理」 C. G. ユング

大垣俊一

日経新聞に「私の履歴書」という、各界の著名人の自叙伝を連載する欄がある。そこにかつて下着メーカー「ワコール」の創業者、塚本幸一が寄せた手記は、さすが時代の荒波をくぐってきた経営者の文章には胸を打つものがあると、深く印象に残るものであった。

第二次世界大戦前夜、軍隊への召集を目前にした塚本は、ある病弱の女性と恋に落ちる。出征の日、病を押して駅頭に見送りに出た彼女は車中に塚本の姿を認め、車窓によるめき寄って、抱えていた包みをどさりと投げてよこした。あとで開けてみるとそこには握り飯と数珠が入っており、包み紙には「命に代えてお守りします」としたためてあった。その数珠を腕に巻いて出征。中国大陸を転戦するうち、塚本はある戦場で至近弾を受けて吹き飛ばされた。その時、数珠は切れて浙江省の泥田の中に飛び散ったが、しかし彼自身はほとんどけがもなく、奇跡的に助かったという。そして戦争が終わり、日本に帰ってすぐに恋人の家を訪ねたが、彼女は既に亡くなっていた。その死去の日を聞いた塚本は衝撃を受ける。それは彼が浙江省で砲弾に吹き飛ばされた、まさにその日だったからである。塚本は恋人がその言葉通り、命に代えて自分を守ってくれたものと信じた。

心理学者ユングに、いわゆる超常現象を心理学的に扱った「共時性 (synchronicity)」の著作がある、と大学院のころに聞いて、本稿表題の論著の収められた本（「自然現象と心の構造」CG ユング・W パウリ著、河合隼雄・村上陽一郎訳、海鳴社）を買って読んでみたが、難解でよくわからなかった。そもそも共時性のわかりにくさは有名らしく、ユング派心理学者による解説書にも、「共時性ということによってユングが言いたかったことを描き伝える努力は、ユングのすべての理論的著書の中で最も不成功に終わった。この失敗は、一部はそのつかまえどころのなさ、その概念がときおり抽象的となる性質によるものである」⁽¹⁾とある。しかしわからないながらも、この論著には一科学研究学徒として興味を引かれるものがあつた。それは一つには、共時性というものが因果律の対抗概念であること、またユングがその存在証明を、推測統計を用いて行おうとしたことによる。因果律は言うまでもなく近代科学の根本概念であり、それへの疑問は科学研究に根本的なゆらぎを生じさせる。また何らかの体系を批判するとき、その批判は、体系内部の論理によって、つまり自己矛盾を起こさせる形をとることで最も強力に遂行される。ユングは科学の根本たる因果律を、同じく科学の一手法である統計を用いて検証しようとしたのである。

ユング (1875-1961) はスイス生まれの心理学者で、フロイト、アドラーと共に、今日の心理学の大きな流れを作った人である。ユング心理学は人間の心の奥、いわゆる潜在意識 (個人的無意識) よりもさらに下ったところに、いわゆる普遍的無意識を想定し、それ

をもとに人間の行動、心理を考察するところに特徴がある、と一般に理解されている。このことは、共時性を扱った本書にも現れている。のちに見るように「普遍的無意識」や、同じくユング心理学のタームである「元型」は、共時性概念のキーワードでもある。

本著作は、第1章「はじめに」、第2章「占星術の実験」、第3章「共時性の概念の先駆者たち」、第4章「結論」、そして最後に「要約」の5部から成る。以下ではまず、なるべくユングの論旨に従って内容を紹介する。ただ、ユングの議論の進め方は行きつ戻りつ、同じような内容や具体例がくりかえし現れたりして必ずしも論旨明快ではないので、初めに共時性の概念一般についてのべた1、4章と最後の「要約」をまとめて紹介し、次いで2、3章を見ることにする。そして後半で共時性という、この難解ながらも魅力的な概念について、個人的な解釈を加えて考察してみたい。

内容紹介

そもそも共時性とはどういう現象なのか、あるいはユングがどのように考えているのか。1、4章に多くの例が述べられているが、いくつか抜き出すと次のようになる。「作家ウィルヘルム・フォン・シュルツは、…自分の幼い息子の写真をシュヴァルツヴァルトでとったある母親の物語を伝えている。彼女はフィルムを現像してもらうために、ストラズブルグに出しておいた。しかし、戦争勃発で彼女は取りに行くことができず、なくなったものとあきらめていた。1916年に彼女はその間に生まれていた娘の写真をとるためにフランクフルトでフィルムを買った。フィルムが現像されると、それが二度感光されているのがわかった。だがなんと下に写っていたのは彼女が1914年に自分の息子をとった写真だったのである！昔のフィルムは現像されずに、どういう具合か新しいフィルムの中にまぎれこんでいたのであった」(p19)。次は有名な '神聖甲虫' の話である。「私が治療していたある婦人は、決定的な時期に、自分が黄金の神聖甲虫を与えられる夢を見た。彼女が私にこの夢の話をしている間、私は閉じた窓に背を向けて座っていた。突然、私の後ろで、やさしくトントンとたたく音が聞こえた。振り返ると、飛んでいる一匹の虫が、外から窓ガラスをノックしているのである。私は窓を開けて、その虫が入ってくるのを宙で捕まえた。それは、私たちの緯度帯で見つかるもののうちで神聖甲虫に最も類似している虫で、神聖甲虫状の甲虫であり、どこにでもいるハナムグリの類の黄金虫であったが、通常の習性とは打って変わって、明らかにこの特別の時点では、暗い部屋に入りたがっていたのである」(p28)。このほかいわゆる千里眼、予知、体外離脱など、超常現象とか ESP (extra-sensitive perception) と言われているような範疇の話が多く挙げられている。ユングは心理療法家として患者に接する中でこうした事例に数多く出会い、それが患者にとって時に重大な意味を持つことに強い印象を受けてきた。そしてそれが、この問題を深く考え始めた動機であると述べている。

もちろん、こういった現象については「ただの偶然」という見方もありうる。特に、因果関係的なものの見方を常識とする現代人にはそう見えるだろう。たぶんそれに突破口を

開くために、ユングは事象の確率に言及する。「偶然の一致はどれもまぐれ当たりであり、非因果的解釈を必要としないというふうには一般には仮定されている。この仮定はそれらの生起が確率の限界を超えているという証拠が欠けている限りにおいて真実でありうるし、また実際真実であるにちがいない」(p13)。一般には、ある事象が偶然生じたにしてはあまりにも低い確率であるとき、そこに何らかの因果関係を想定する。この時、もし常識的に考えて因果関係がありえないならば、因果によらない何らかの「連関」を認めざるをえない。こうした視点で行われた研究として有名なものに「ラインの実験」があり、ユングも本書で多くのページをさいてそれを紹介している。アメリカの心理学者、JB ラインが行った実験とは、次のようなものである。実験者がいくつかの種類の印のついたカードをテーブルに置いて行き、離れたところにいる被験者が、どの印のカードが置かれたかを答える。たいていの場合、印を正しく言い当てる確率は偶然を有意に上回らなかったが、特定の被験者の場合、偶然とは考えられないほどの的中率が高かった(25万分の1という確率が示されている)。ラインはこの実験を、両者の距離を変えたり、時間をずらしたり、カードをサイコロに変えたりして行い、どのような状況や被験者のもとで「偶然とは考えにくい」結果が得られるかを検討した。その結果、的中率に対して被験者の期待感が強く影響することがわかった。「関心の欠如や倦怠は否定的に働く因子であり、熱中、積極的な期待、希望や ESP の可能性に対する信頼はよい結果を生み、それらはいかなる結果が出るかを決定する現実の条件であるように思われる」(p23)。しかも、印を言い当てる能力は距離や時間に影響されない。「(的中率に対し) 距離は原則として何ら効果を持たないという事実は、問題となっている事柄が、力やエネルギーの現象ではありえないということを示している。…更に特記すべきことは、時間も根本的には抑制的な因子ではないという事実である。…結局この種の事象は、因果性の観点からは考察することができないと言わざるをえない」

(p22)。因果関係の背後にはエネルギーのやり取りがあるはずだから、距離が関係ないとすると因果関係は疑わしくなる、という論法だが、電波など、長い距離にわたって減衰しない物理現象もあるので、この点については疑問がある。しかし時間の方は重要である。因果関係は時間の進行に伴って起こるとされている。つまり、前に起こったことが原因となって後で結果が起こるのであって、後で起こったことか前に起こったことの原因であるとは通常考えられない。時間の関与を否定した実験の内容については述べられていないが、たぶん後で行われる実験の結果を、前もって予想させたのではないかと思われる。

では共時性とは、一般的に言ってどのような現象を指し、特徴をもつのか。「私がこの用語(=共時性)を選んだのは、意味深くはあるが因果的にはつながっていない二つの事象が同時に生起するということが本質的な基準であるように思われたからである。それゆえ私は、単に二つの事象が同時に生起することを意味するにすぎない『併時性』と対照的に、ある同一あるいは同様の意味を持っている二つあるいはそれ以上の因果的には関係のない事象の、時間における偶然の一致という特別な意味において、共時性という一般的概念を用いているのである」(p33)。つまり、認識する当事者にとって「意味のある偶然の一致」が共時性であり、意味がなければ併時性となる。ユングはその著の最後の要約部で、共時

性を次の3つに分類している。

- a) 客観的事象と心理現象が、同時に生ずるように知覚されるもの
- b) 現在の時点における、空間を超越した一致
- c) 現在と未来にわたる、空間を超越した一致

a はたとえば、そのとき望んだことが実際に起こる、など。b は、いわゆる「千里眼」。c は予知、予言などがそれぞれの例になると思われる。

1、4章では、因果関係を越えた共時的事象が存在することを認めた上で、それがどのような場面で生じ、人間にとってどのような意味を持つのかについても論じられている。ユングは共時性の背後に、人間の「普遍的無意識」「元型」の存在を見る。人間には表面に現れるいわゆる「意識」があり、そこで考えたり喜んだり 怒ったりしているが、その奥に「個人的無意識」がある。これは過去に経験して忘れてしまっているが、まだ心のどこかに残っている、というような、いわゆる「潜在意識」と言ってよいものだろう。「普遍的無意識」はさらにその奥にあり、もはや個人を越えて人類一般に共通のものである。⁽²⁾「元型」は、この普遍的無意識の構成要素とされる (p26)。普通、人間は意識のレベルで精神活動をしているが、時に個人的無意識や普遍的無意識のレベルまで下ってゆくことがあり、これを「心的水準の低下」と呼んでいる。夢はその一例だろう。心理療法家としてのユングは、患者が絶体絶命、不可能など危機的状況にあるとき、心的水準低下が起こり、そこに共時的現象が多く発生することに気づいた。初めに紹介した「神聖甲虫」はその具体例である。あるいはラインの実験のように、本人が何かを強く希望することが、実際にそのような現象を呼び寄せるという傾向もあり、ユングはそれを「希望の元型」ないし「奇跡の元型」と呼んでいる⁽¹⁾。つまり世界の諸現象は因果律のみによって捉えられるのではなく、それでは説明できない、あるいはそれ以外の原理(=共時性)によっても説明できる世界が開けている。それを認めることによって、我々は因果律のみに縛られない、新しい世界観を得ることができるかとユングは主張するのである。

第2章は、ユング自身が占星術の事例をもとに、統計を用いて共時性の存在を証明しようと試みた部分である。この章の詳細は占星術の知識がないと理解困難だが、私が把握した限りで紹介すると以下ようになる。ユングは多数の夫婦の、男女それぞれの誕生日のデータを集め、それらの年月日における天宮図(太陽、月、惑星、星座の配置を図化したもの)を調べた。占星術では伝統的に、結婚する男女の間では、女性の誕生日における月の位置と男性の誕生日における太陽の位置が合(地球から見て一直線上)や、衝(地球から見て180度反対側)にあるなどの特別な関係があるとされている。そこでユングの目的は、結婚組において、非結婚組に対し、そのような天宮配置が有意に高いレベルで検出されるか、ということにあった。180組の夫婦について行った予備調査で、ユングは太陽、月、金星、火星や星座について、夫婦の間で誕生日におけるそれらの合と衝の関係を調べた。そしてたとえば、月(女) - 合 - 太陽(男)の例がいくつあったか、など、あらゆる組合せについてその出現頻度を求め、高頻度の項目から順に並べた頻度分布を描いてそれを結婚組と非結婚組で比較した。この図において最大頻度を示した4つの天宮図パターン(占

星術で、結婚相とされているものを含む)の頻度は、結婚組では7-8%、非結婚組では4-5%で、結婚組のほうに偏っているように見えたが、検定の結果有意な差は検出されなかった。他の差もいろいろ検討されたが、両群の数の差に帰せられるなどで有意な結果をもたらす見込みがない。従ってこの予備調査の結果は、ユングの意図に対しては否定的である。

次にユングは、検討する結婚組の数を483に増やし、占星術において伝統的に結婚相とされる天宮図パターンが、それ以外のパターンに対して有意に高い比率で現れるかどうか に絞って検討した。実際の計算は統計学者に依頼し、結果は巻末の付録部に示されているが、独立試行ないし二項分布の理論もとづく比較的単純なものである。その結果、最大頻度を示した天宮相、月(女)一合一月(男)(占星術で結婚相とされるものの一つ)が実際の頻度で偶然に現れる確率は1/1500となり、有意である。また、483組をデータが収集された単位ごとに180、220、83組に分けると、そのそれぞれにおいて結婚相が最上位を占め、3群すべてにおいてそうなる確立は1/6250万と計算された。これはほとんどありえないことが起こっていることを示している。ただし以上の計算過程は、当初から種々問題を含んでいたらしく、本文中にも何度も計算をやり直した形跡がある。私自身の印象を言えば、どこかに差があるのではないかという視点でいろいろ探し、差のなかったものを無視して差の部分だけ強調するのは、部分的には正しくてもトータルに見て正確な検定とはいえない。実際本書は、占星術にからむ第2章の内容に疑問が呈されたため、出版が大幅に遅れたとされている⁽¹⁾。共時的でないし超常的現象を、統計的に分析することの難しさの一端が表れているといえよう。

第3章では、共時性の概念に共通する思想を歴史の中に辿り、紹介している。道教の老子、荘子、古代ギリシャの哲学者たち、ドイツ神秘主義のアグリッパ、生気論のドリーシュ、ケプラー、ライプニッツなどが取り上げられている。ユングがこれらの思想家たちに共通して見出すのは普遍的無意識の認識と、「個の中の全体」のイメージであると思われる。前者については既に触れたが、後者については、たとえばライプニッツの单子論がある。单子(モナド)は全体(宇宙)に対するその構成要素だが、それ自身の中にまた全体を含むとされる。人間も一つの单子であり、従って一人の人間の中には全宇宙が投影されていると考えるのである。ライプニッツはモナド論の発展として「予定調和」ということも言っているが、それは「諸事象がそれ自体において因果論的に結合しなくても、それらの同時性や相互関係が生ずる」(p112)ということであり、これはユングの共時性に通ずる概念と言えるだろう。

考察

1. 超常現象

ユングが共時性概念のよりどころをする事例の中には、一般に超常現象と呼ばれる、一見因果関係を想定できない話が多く含まれている。ここでは、これらが本当に因果性で説

明することはできないものなのか、因果性による説明の可能性を探ってみる。第一は、統計的な偏りと、印象によるその強調である。たとえばユングが挙げる次の例。「私の乗る市電の切符が、すぐその後で買う劇場の切符と同じ番号であり、その同じ晩に電話の呼び出しがあつて、同じ番号が電話番号として再び言われるという事実と直面するとき、…これらの事象どうしの因果的連関はどんなに考えてもありえないように私には思われる」(p10)。しかし一致する可能性があるのは、市電の切符、劇場のチケット、電話番号に限らない。何かに支払った金額、ラジオやテレビで報じられる国家予算の数字、紙幣に印刷された番号や自動車の距離メーター、宝くじの番号など。我々は日々、その種の数字の氾濫の中に生活しており、ある日たまたま何らかの符合に出会ったとしても不思議ではない。統計検定においても、分散分析の多重比較のように、「どこかに有意差が見出される確率」を評価するときは、 $P < 0.05$ の通常レベルではなく、もっと条件をきびしくして計算するのは、こうした効果に配慮してのことである。しかも事象がランダムに起こるということは、短期間に集中して起こることもあるということである。このことについてはユングも気づいている。「偶然の出来事が、非周期的に集まる傾向にあることは必然のことである。なぜならそうでなければ事象は周期的あるいは規則的にしか配置されえず、これは定義から偶然を排除するからである」(p10)。最後のほうは少々わかりにくいだが、要するに、時に集中して発生するのが偶然というものである、ということだろう。その「集中的発生」に遭遇した人が、そのことに強い印象をうけたとしても不思議はない。さらに、これに本人の感受性の問題が加わる。何かあるのではないかと注意している人は、より多くのことに気づくだろう。この感受性の鋭敏化ということの中には、ユングの言う「心的水準の低下」や、「希望の元型」ということも含まれるかもしれない。そのような人々は、自らの関心事に対して感覚が鋭くなり、そこに事象間の「意味のある連関」を見出しやすくなるということである。

第二は、一見因果関係を想定できなくても、実際には因果性による説明が成り立つ可能性である。科学の進歩とは、それまで説明できなかったことを説明し続けた歴史だった。超音波が知られなかったころ、コウモリがなぜ夜に支障なく飛べるのかを因果的に説明することはできなかった。生きる希望を強く持った患者が、病を乗り越えて回復するということは、かつては呪術的医療の基盤だったろうが、今は精神状態と免疫機能による説明が成されている。ユングもこの点に触れ、占星術に関連して次のように述べている。「太陽の黒点周期と死亡曲線との間のよく知られている符合…そのつながりは地球の磁場の乱れにあるように思われる。…惑星の衝や合や正方形の配置が陽子の放射を増加せしめ、それによって電磁嵐を引き起こすのに大きな役割を果たしていることを示すように思われる。他方、占星術では好ましい三角形や六角形の相は、一定の電磁波気象を作り出すことが報告されてきた」(p59)。特に、最近宇宙物理学で注目されている「ダークマター」はいろいろな可能性を秘めている。宇宙には、目に見える物質の6倍とも24倍ともいわれるダークマターがあるが、この実体が何で、何をしているのかはわかっていない。もちろんわれわれの身の回りにもある。これが何らかの現象の発現や情報伝達に関与している可能性はな

いのか。世界はまだまだ謎に満ちている。科学者が新しい理論によってそれらを因果的に説明しようとする試みは、これからも続くだろう。

第三は、あとの第四の考えと共に通常の因果性の範疇には属さず、「形而上学」の批判を受けそうなものだが、「元型由来因果」ということを考えてみたい。これは私が勝手に名づけたのであって、ユングがそのように言っているのではない。このことの説明のために、一つ個人的な例を挙げる。私は一般に甘い菓子は好きな方ではないが、マフィンには例外である。スーパーなどで見かけると、家にまだあっても、つい買ってしまうことがある。それがなぜなのか、私にはわかっているつもりである。子供のころ、年上の子がマフィンをうまそうに食べているのを見て、ほしかったのだがもらえなかった。それがトラウマ(?)になっているらしい。私はこのことをたまたま記憶しているが、もしその経験を忘れてしまっていたらどうだろう。なぜ自分がついマフィンに手を出してしまうのか、自分でもわからないだろう。これはいわば「潜在意識由来因果」と言うべきものだが、もしユング心理学に言う「普遍的無意識」のレベルに由来する行動があったらどうなるだろうか。普遍的無意識は人類共通のものとされている。とすればそのレベルに遡る心理や行動が、しかるべき場面、環境が引き金となって、異なる人物間に同時に生起するかもしれない。そしてそこに、数々の不思議な一致が発生しうる。ただしユングは、こうした考え方には否定的なようである。「人は元型的な背景を知覚するや否や、独立した心的ならびに物理的過程における相互の同化作用を、元型における(因果的)効果にまで遡ってみたくなり、そのために、それらが単なる偶発性のものであるという事実を見逃しがちになる」(p139)。

第四は、「個の中の全体」という考え方である。たとえば既に紹介したライブニッツのモナドは、全体の構成要素でありながら、その中に縮図として全体を含んでいる。同様に一人の人間の中に過去から未来に至る世界の全体像が組み込まれているなら、千里眼も予知も何ら不思議なことではない。自分の中から、該当するある時、ある場所の出来事を引き出せばよいわけである。そしてその全体像が心の奥深くにしまわれているとすると、そこに下ってゆくことができるのがいわゆる霊能者や預言者であり、下って行くプロセスが「心的水準低下」ということになるだろう。ただしこうした考え方には、むろん何ら実質の根拠があるわけではない。

2. 因果律

以上は、一見因果性では説明できないと思われる事例を、因果的考え方に慣れた感覚でも受け入れやすいような形で提示した仮説である。しかしそもそも因果性、因果律とは何なのだろうか。それはどれほど確実なものなのか。哲学者による因果律の定義は、「もしC (cause=原因、を想定) が起こるならば、(そしてそのときのみ) E (effect=結果、を想定) は常にCによって産出される」⁽³⁾ のようになる。「因果性の原理」とは、「どんな出来事であれ、因果的に説明できるという主張」⁽⁴⁾、つまりすべての事象は原因と結果の関係において説明可能、ということであるという。因果律は、西欧近代の思考パターンの中に深く根をおろしている。「因果律の卓越に対する信仰は、西洋の人生観の基本的教養の一つ

である。現代において我々は、確実に、宗教的信仰のどのような教義への疑問よりも、因果律の主要原理への疑問のほうについて、大きな反対に出会うであろう⁽¹⁾。その結果、次のような見解すら現れるに至った。「ラプラスは、ある時点における宇宙の状態についての情報と、すべての因果法則の一覧表とが手に入りさえすれば、世界の歴史の他のいかなる時点の状態も予言できるし遡言できると主張した⁽⁵⁾。これを「ラプラスの魔」という。因果律がなぜこれほど強い支持を得るかといえば、一つには実用的だからであろう。「既に太古の時代に、人間は時間的な前後関係にある特定の二つの事象が、くりかえしペアになって生起する傾向があることに気づいたろうし、そうすれば、その二つの事象の中で時間的に後のもの（後継事象）が人間にとって望ましいものであれば、時間的に前のもの（先行事象）ができるだけ起こりやすくするような手立てを講じ、逆に後継事象が人間にとって避くべきものであれば、それに対する時間的な先行事象を起こり難くするためにいろいろと手を尽くすということも当然想像できる」（p253 村上解説）。その結果、単に実用的だから使おうというレベルを越えて、因果律は我々の心底に根付いたのかもしれない。実際それは疑うべからざる真理と見える。たとえばカナヅチで板をたたいたら、板が割れた。だからカナヅチでたたいたことが原因となって板が割れた。そこに力学的な説明を加えることもできる。ここに一体どんな疑問があるというのだろうか。

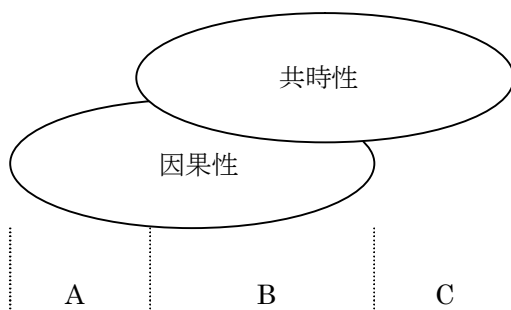
この「疑うべからざる真理」に、異を唱えたのがヒュームである。ヒュームはこう考えた。「原因とは、ある対象に先行し、かつ接する対象であって、しかも前者と深く接合しているために、一方の対象の観念が他方の対象の観念を…作るように心を決定するようになったものである⁽⁶⁾。つまり我々は、A が起こった後に B が生じたという事象の連続をくりかえし見せられることで両者の結びつきを信じるようになったにすぎず、「A が B の原因である」、つまり原因と結果の関係が、人間の認識と独立に、自然界に実在する法則であることを示す何の根拠も持っていない。「哲学教授たちが大学で実に何世代にも渡って使ってきた伝統的な例によると、我々が実際に知覚するのは、一つのビリヤードの玉が他の玉に、ある力でもって触れることだけであり、それから我々は、二つ目の玉が動き離れるのを見るのである。我々は実際には因果律を‘見’てはいない⁽¹⁾、ということになる。ヒューム以来、多くの哲学者が因果律の真理性に疑問を持ち、またそれを否定するようにさえなった。「非因果論を唱える虚無主義的人々は、因果結合という概念は『盲目的崇拜物』である（ピアソン）、『類推による虚構』である（ファイヒンガー）、『迷信』である（ウィトゲンシュタイン）、あるいは『神話』である（トゥールミン）と宣言する⁽³⁾。ポパーは反証主義の立場から、因果律は反証可能でないがゆえに「採用もしなければ排除もしない」「形而上学的なものとして、科学の領域から排除する⁽⁴⁾と冷ややかだし、ハンソンは認識における理論負荷性を重視する立場から、次のように因果論を相対化する。「原因と結果という形を構成している一対の出来事の間には存在する必然性のうちのあるものは、本当は、一方の出来事からもう一方の出来事を推論することを保証してくれるような理論系の内部での、前提と結論との間に得られる必然性であることが多い⁽⁵⁾。つまり、因果律は現象を見る者が抱く理論の枠組み内部においてのみ、意味を持つというのである。量子力学にお

いて、同一の原因から生ずる結果は時に不確定で、結果の全体を統計的に記述しうるにすぎないことが示されたことも、因果信仰に対する打撃となった。因果律に対するこうした批判にはまた反論もあるが、いずれにせよ、ヒューム以前のように因果性を、自然界の实在、疑いなき真理とみなすことは、もはや不可能になったと言ってよい。ブングは「因果原理は万能薬でもなければ神話でもない」「それはある一般的仮説であって、独自の領域において近似的に妥当する」⁽³⁾と述べているが、このように、限界と有効性を共に認めた上でそれに立脚するというのが、今の科学哲学の主流的態度であるように思われる。

共時性の問題を考える上で、因果性のこの限界を認識することは重要である。因果性の対抗概念としての共時性に対し、因果性の側から、根拠薄弱、単なる思い込みであるという批判が成されてきた。しかし因果性もまたその根本に主観を含むと知るとは、因果律を相対化し、両者の位置関係を流動化させるだろう。因果性に一日の長があるとすれば、それはその上に構築された体系の精密さ、膨大さとその実用性だが、そのこと自体、共時性がもう一つの説明原理として成立し得ないことを示すものではない。こうした視点から、因果性と共時性の位置関係について次に考察してみる。

3. 別階層説明原理としての共時性

因果性が絶対確実なものではないとすれば、我々は共時性を、因果性とは別次元での説明原理として想定することができる。因果律は、世界は原因と結果の継起として成り立っていると見る。共時性は、世界が意味のある事象の同時発生によって構成されていると見る。これらは並立する世界観であり、別々の説明原理である。世界の事象の中には、因果性か共時性のどちらかでしか説明できないように見えるものもあれば、どちらの解釈も成り立つものもある。これを図化すると下のようになる。



因果性でのみ説明できること (A) とは、そこに何の意味も付与できないが、常に連続して起こる、という場合だろう。ただ漠然と眺めていても、風が吹けばちりが舞う。因果性でも共時性でも説明できること (B) というのはたくさんあるが、たとえばいわゆる偶然の一致のように、それぞれがたまたま因果的に同時に生じたとも見られるし、そこに何らかの意味を見出すこともできる、という場合である。そして共時性でしか説明できないこと (C) の中には、いわゆる超常現象、ESP などのあるものが入ると思われる。ただ、因果

性と共時性は説明原理としてはかなり異質なので、図では同一平面に描かず、ずらして配置してある。生物学の理論にたとえると、進化における小進化と大進化、生態学におけるメカニズムと適応的意味、のような関係と言えるかもしれない。遺伝子レベルなど小進化の理論で説明できることもあるし、定向進化など、大進化の理論で説明できることもある。その両方で別々の記述が成り立つこともあるし、現段階ではどちらかでしか扱えない領域もある。生物の生態や行動を、メカニズム（至近要因）のレベルで扱うこともできるし、適応的意味（究極要因）の観点から論ずることもできる。両方の説明が成り立つ場面があれば、どちらか一方での解釈が適切な現象もあるだろう。こういう見方をすれば、共時性を否定するために、超常現象の因果論的解釈にこだわるというようなことは必要なくなる。共時性というものを丸ごと認めて、そこにどのような世界像が構築されるのを見ればよい。ちょうど、因果律を信ずることで科学的世界観が築かれたように。

では、共時性的世界観とは何だろうか。それは因果性的世界観とどのように違い、それを想定することにどのような意味があるのだろうか。その一つの答えは、ユングの「神聖甲虫」の話の中にあるように思われる。精神的に追い詰められ危機的状況にある患者が、自分の夢と現実の現象との間の「意味のある一致」に衝撃を受け、そこから困難や危機を克服する勇気を与えられる。これを単なる偶然と割り切る因果的な見方しかしないなら、そこにはまた救いもない。「希望の元型」という言葉もあるように、まさに「信ずるものは救われる」のである。ユング派心理学者の河合隼雄は次のように言う。「因果的思考にのみ頼っていると全く解決不能と思えるようなことでも、共時的現象の存在を前提とすることによって、そこに何らかの希望を見出せるということはすばらしいことである。私は心理療法師としてこのような考えに支えられて、誰もが見放すような人たちにお会いしてきたと思っている」⁽¹⁾。しかし共時性は、ただ奥深く豊かな世界をのみをもたらしののだろうか。ユングが共時性の先駆者として道家の思想家たちを挙げるように、共時性的世界観は、東洋とか古代、あるいはいわゆる「未開社会」ではむしろ普通だった。現在でも日本の沖縄など、古来の伝統がよく残されているところでは、超常的現象が日常的なこととして語られる風土がある。しかしそこではまた、霊能者の言葉を盲信し、精神的退行を起こして、ほとんどその言いなりになっているような例もないわけではない。あるいは古代マヤ文明において、「太陽の運行を維持するために」おびたしい人々が生贄として犠牲になったことを想起してみるとよい。共時性的社会とは、一面において人々を迷信によって圧迫し、残酷な行為を強いる社会かもしれないのである。「希望の元型」ならぬ「恐怖の元型」が、そこに現出する。因果性を基礎とする近代科学の発展の背景には、このような非人間的な束縛を逃れようとする、人々の確固とした意思があったと考えられなくもない。

遠い異国の地で砲弾を受けた恋人の、身代わりとなって散華する女性の話は聞くものの胸を打つ。私たちの心の中には、それがなぜ真実でありうるのかという考察を越えて、このことはきっとそうあってほしいと願う気持がある。しかし実はその美しさの傍らに、おどろおどろしい人間存在の陥穽が口を開けていないとも限らない。覚悟を決めてその「美

しくも残酷な世界」を去り、「無味乾燥な明快さ」を選んだのが科学である。若き日のユングはアインシュタインと会い、「多少見くびった感じで、彼（アインシュタイン）は何といっても‘分析的’な精神の持ち主だから、と語っていた」⁽¹⁾という。しかしもし共時性の支持者たちが、因果性の信奉者はただ時代の風潮に洗脳され、共時性的世界観とその豊かさに無知なゆえにそのようにしていると考えるのであれば、それは科学や科学者というものを、いささか「見くびって」いることになりはしないだろうか。

引用文献

- 1) プロゴフ 1987 ユングと共時性 河合隼雄・河合幹雄訳 創元社（原著 1973）
- 2) 河合隼雄 1977 無意識の構造 中公新書
- 3) ブング 1972 因果性 黒崎宏訳 岩波書店（原著 1959）
- 4) ポパー 1971 科学的発見の論理（上）森博・大内義一訳 恒星社厚生閣（原著 1934）
- 5) ハンソン 1986 科学的発見のパターン 村上陽一郎訳 講談社学術文庫（原著 1958）
- 6) 杖下隆英 1982 ヒューム 勁草書房